

美津島町文化財調査報告書 第10集

古代朝鮮式山城

かね だ じょう あと
金 田 城 跡 II

2003

長崎県美津島町教育委員会

美津島町文化財調査報告書 第10集

古代朝鮮式山城

かね だ じょう あと
金 田 城 跡 II

2003

長崎県美津島町教育委員会



二ノ城戸城門跡航空写真



ピングシ山鞍部南西部出土建物跡



金田城と浅茅湾



東部石壁



二ノ城戸城門跡



二ノ城戸城門跡

発刊にあたって

この度、発刊することになりました美津島町文化財調査報告書第10集「金田城跡Ⅱ」は、国・県の補助を受けて実施しています金田城跡保存修理事業の平成11年度から13年度までの報告書です。

本史跡の調査も今年度で節目の10年を迎え少しずつではありますが、城の全体像が見えつつあります。平成11年度には二ノ城戸より当時の城門跡が出土し、これまではっきりとしなかった門の形態が明らかになりました。また、ピングシ山鞍部には唯一の土塁が残っており、周辺からは3棟の掘立柱建物跡が出土したことから城の中核と考えられています。

今後は整備・修復作業に力を注ぎ、島内・外を問わず訪れた人たちに朝鮮式山城「金田城」の全貌・役割が理解できるように進めていきたいと考えています。

古代～近代まで国防の拠点として利用された金田城は国の特別史跡に指定されて今年で21年目になります。貴重な大陸系の植物が自生し、リアス式海岸が顕著に残る浅茅湾が一望できるこの貴重な歴史遺産を、歴史学習の場、自然散策の場、憩いの場として活用できるよう整備を進めていきたいと考えています。

最後になりましたが、調査に際しまして御理解・御協力をいただいた地元黒瀬・箕形地区の皆様、ご指導を賜りました文化庁記念物課、長崎県学芸文化課及び関係各位の皆様に対しまして心から感謝いたします。

平成15年3月

長崎県美津島町教育委員会

教育長 二宮昌幸

例 言

1. 本書は、長崎県下県郡美津島町大字黒瀬および箕形に所在する金田城跡の整備に伴う発掘調査の報告書である。
2. 本書は平成11年度（1999）から13年度までの調査成果を収録している。
3. 調査は、美津島町教育委員会が主体となり、長崎県教育庁学芸文化課の指導・助言を受け、実施した。

4. 調査関係者は次のとおりである。

美津島町教育委員会

二宮 昌幸（教 育 長）
俵 次男（事 務 局 長）
小田恵美子（事 務 局 次 長）
俵 輝孝（生涯学習係長）
田中 淳也（生涯学習係主事） 調査担当
上田 健一（ ）

長崎県教育庁学芸文化課

古門 雅高（主任文化財保護主事） 調査指導

5. 本書は田中淳也が執筆した。
6. 本書関係の写真撮影は、調査中のものは田中・古門が担当した。
7. 製図は古門が行った。
8. 本書関係の出土遺物と図面および写真は、美津島町教育委員会ならびに長崎県教育庁学芸文化課久原資料整理室に保管している。
9. 本書の編集は、田中・古門による。

目 次

第1章 金田城の環境	1
(1) 地理的環境	1
(2) 歴史的環境	1
第2章 調査にいたる経緯	4
(1) 調査にいたる経緯	4
(2) 年度別環境・保存整備	4
(3) 整備委員会の組織と審議	5
第3章 調 査	
(1) 整備に伴う調査の履歴	12
(2) 二ノ城戸城門跡の調査（平成11年度）	12
(3) 蔵ノ内平坦部の調査（平成12年度）	17
(4) ビングシ山鞍部南西部の調査（平成13年度）	22
(5) 東南角石塁付近の調査（平成14年度）	26
附 編 自然化学分析	
(1) 目 的	33
(2) 分析 方 法	33
(3) 各年度の調査における測定結果	33

挿 図 目 次

第1図	金田城位置図①	1
第2図	金田城位置図②	2
第3図	金田城位置図③ (S = 1 / 25,000)	3
第4図	二ノ城戸城門跡実測図 (S = 1 / 60)	14
第5図	蔵ノ内試掘坑配置図 (S = 1 / 500)	18
第6図	蔵ノ内地区第11試掘坑 (S = 1 / 40)	19
第7図	ピングシ山鞍部の掘立柱遺物跡 (S = 1 / 80)	23
第8図	東南角の調査区配置図 (S = 1 / 200)	27
第9図	東南角石塁付近の掘立柱建物跡平面図 (S = 1 / 80)	29

図 版 目 次

図版1	二ノ城戸城門跡	16
図版2	蔵ノ内遺構検出状況	21
図版3	掘立柱建物跡	25
図版4	東南角石塁	30

第1章 金田城の環境

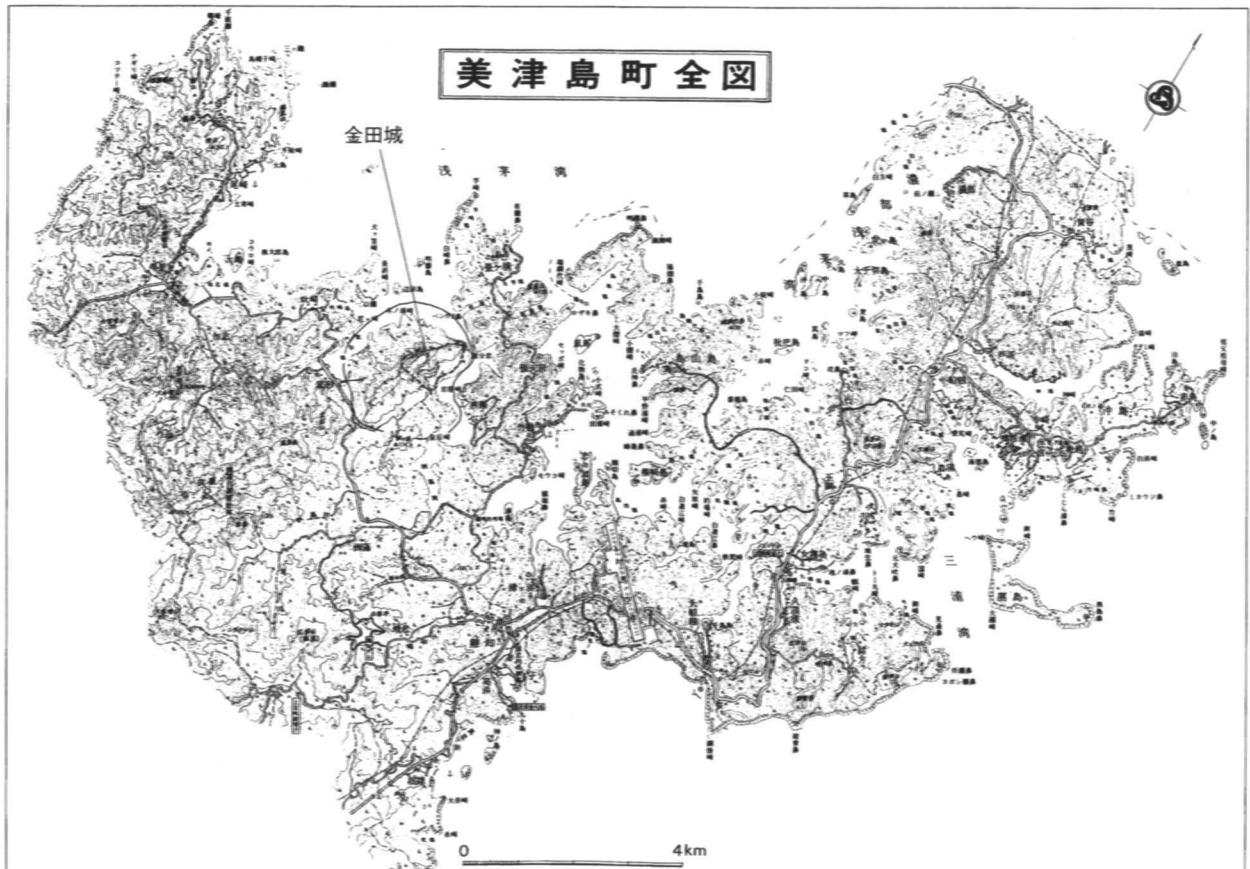
(1) 地理的環境

美津島町は対馬のほぼ中央部に位置し、北部には景勝地浅茅湾を隔てて豊玉町に、東部は対馬海峡、西岸は朝鮮海峡に面し、南部は上見坂山系を境として厳原町に接している。島全体が「対州層群」とよばれる分厚い堆積岩からなり、主峰白嶽(519m)から城山(276m)にかけての連山は白嶽石英斑岩が顕著に表れている。また、金田城跡にはゲンカイツツジ等の大陸系の植物とヤブツバキ・モッコク・サカキ等の露岩地特有の植物が自生しており、自然散策・植物観察に訪れる人も多い。また、山頂からは眺望もよく浅茅湾も見渡せ、空気の澄んだ日には遠く韓国も望むことができる。浅茅湾内と海岸周辺には大小60余の島が散在し、沈降と隆起によってできたりアス式海岸で形成された浅茅湾は天然の良港も多く、漁業も盛んである。

(2) 歴史的環境

浅茅湾には弥生・古墳時代を中心とした古墳・墳墓がありそのほとんどが、箱式石棺墓で岬の先端部や小島にみられる。古代には難知に大型の高塚古墳が出現する。対馬海峡に面した東海岸沿いには前方後円墳3基、円墳2基から成る根曾古墳群があり、その西方約1km離れた丘陵に出居塚古墳がある。墳丘は残存状態もよく全長40mに及び対馬で最大・最古の古墳であり、県内唯一の前方後方墳である。

金田城が築かれたのは白村江敗戦から4年後の西暦667年(天智6)、高安城(大阪府)・屋嶋城(香川県)の二城と時を同じくして築かれた。今でも現地を訪れると当時の石塁をみることができる。石塁の延長は約2.8kmに及び、石垣の高さは低いところで2~3m、高いところでは4~5mを測り谷部では6~7mに達する。調査の結果、防人が城内で過ごしたと考えられる掘立柱建物跡も確認されており、いずれ全体像が解明されるであろう。



第1図 金田城位置図①



第2図 金田城位置図②

破線は石塁線



第3図 金田城位置図③ (S = 1/25,000)

実線は指定範囲
破線は石塁線

第2章 調査にいたる経緯

(1) 調査にいたる経緯

金田城跡が国の特別史跡に指定されて今年（平成14年度）で21年、発掘調査に着手して10年になる。調査報告書は平成11年度に調査開始時より平成10年度（平成11年度出土の二ノ城戸城門跡の結果は速報的に掲載）までの6年間分を刊行した。今回の報告書は平成11年度～13年度の3ヵ年分の内容を集約したものである。それぞれの調査地については前年度の整備委員会で協議しており、平成11年度は二ノ城戸の調査を実施した結果、城門跡が出土している。平成12年度の調査は初めて城の外、金田城の入り口「蔵ノ内」でおこなったが、遺構の確認はできなかった。平成13年度はピングシ山鞍部の南側で調査をした結果、建物跡1棟が確認された。並行して整備も進めており、調査結果が反映され現地において歴史を学び、遺構見学が可能となるよう整備していく。

(2) 年度別環境・保存整備

保存整備は昭和55年度の史跡境界杭設置に始まりその間、ほぼ毎年何らかの整備をおこなってきた。平成4年度に『特別史跡金田城跡環境整備基本計画書』を策定し各種調査・整備を進めてきたが、新たな知見が多く判明したことによって修正する必要性が生じた。その結果、平成13年度に新たな『環境整備基本計画書』が、文化庁・整備委員会・県教育委員会・関係機関等の意見を集約し、町の方針・関連計画等を十分考慮した上で策定された。

[平成11年度]

- ・二ノ城戸試掘調査 城門跡出土 礎石・根石確認
- ・石墨図化 1/20 立面・平面・断面図 72㎡
横断面図 1断面 石垣面清掃
- ・説明板・案内板設置 説明板2基・案内板4基
- ・報告書刊行 平成5年度～平成11年度分 500部
- ・整備委員会 1回開催

[平成12年度]

- ・蔵ノ内試掘調査 遺構未確認
- ・石墨図化 1/20 立面、平面、断面図28㎡
- ・案内板設置工事 それぞれ登山道入口・登山道頂上南付近・大吉戸神社に設置し来訪者の見学を容易にする
- ・通路整備 登山道からピングシ山付近の遊歩道を整備し見学の時間短縮・安全確保を行う
- ・頂上付近転落防止柵 頂上付近（砲台跡地）の崖・井戸の周辺に柵を設け来訪設置工事者の事故を未然に防止する

- ・整備委員会 1回開催
- [平成13年度]
- ・ビングシ山鞍部試掘調査 掘立柱建物跡1棟検出
- ・石塁図化 1/20 立面, 平面, 断面105.4m²
基準点測量4級基準点 2箇所
- ・樹木伐採 二ノ城戸～三ノ城戸の石塁周辺 5,000m²
- ・図面作成 1/1000→1/500
- ・整備委員会 2回開催
- [平成14年度]
- ・東南角周辺試掘調査 掘立柱建物跡2棟検出 突出部確認
- ・遺構撮影 二ノ城戸城門跡・掘立柱建物跡1棟
- ・石垣調査 石塁全体の精密調査
- ・実施設計 環境整備工事の設計
- ・環境整備工事 通路修復・土塁整備・遺構表示
- ・報告書刊行 平成11年度～13年度 500部
- ・整備委員会 2回開催

(3) 整備委員会の組織と審議

○第11回整備委員会

①開催日時 平成11年10月27日(水)～28日(木)

②構成

委員名	八木 充【京都学園大学人間文化学部教授】
	小田 富士雄【福岡大学人文学部教授】
	中村 一【京都造形芸術大学教授】
	坂上 康俊【九州大学文学部教授】
	永留 久恵【郷土史家】
	扇 貢【美津島町文化財保護審議会委員】
指導	本中 真【文化庁記念物課主任文化財調査官】
	高野 晋司【長崎県文化課埋蔵文化財班課長補佐】
	古門 雅高【長崎県文化課文化財保護主事】 調査指導
町組織	川本 初實【教育長】
	松村 利光【事務局長】
	福井 順一【生涯学習係長】
	小田 恵美子【生涯学習係副参事】

③審 議

(ア) 発掘調査

二ノ城戸より城門跡が出土（礎石・敷石等ほぼ原型のまま）出土遺物から7世紀後半のものと確認された。礎石は石英斑岩，敷石は水成岩（粘板岩）を使用している。確認できるすべての門礎を比較し，城門跡に雨水が流れ込まないように対策を講じる。見学ルートを設定する。

(イ) 整備内容

- ・案内板等の設置
- ・石塁図化
- ・報告書の作成（二ノ城戸の結果も掲載する）

ウ 次年度事業内容

- ・発掘調査 蔵ノ内（平坦部）
- ・遊歩道の整備
- ・案内板の増設
- ・文献調査（宗家文書）

(エ) その他

- ・鞍部付近の名称を決める。
- ・大吉戸神社に浮き棧橋を設置し海上ルートを明確にする。
- ・石塁付近の高木を伐採し海上から一部見えるよう検討する。
- ・城門跡には立ち入りができないようにする。

○第12回整備委員会

①開催日時 平成12年10月20日(金)～21日(土)

②構 成

委員名 八 木 充【京都学園大学人間文化学部教授】
小 田 富士雄【福岡大学人文学部教授】
中 村 一【京都造形芸術大学教授】
坂 上 康 俊【九州大学文学部教授】
永 留 久 恵【郷 土 史 家】
扇 貢【美津島町文化財保護審議会委員】
指 導 本 中 真【文化庁記念物課主任文化財調査官】
高 野 晋 司【長崎県文化課埋蔵文化財班課長補佐】
古 門 雅 高【長崎県文化課文化財保護主事】 調査指導
町 組 織 犬 束 甫【教育長】

松 村 利 光【事務局長】
福 井 順 一【生涯学習係長】
小 田 恵美子【生涯学習係副参事】
田 中 淳 也【生涯学習係主事】 調査担当

③審 議

(ア) 発掘調査について

蔵ノ内平坦地での調査を実施したが、築城当時（古代）の遺構・遺物は検出できなかった。地名と地形（平坦地）から調査地を選出したが、近代の砲台基地に伴う倉庫群等のほかは何も確認されなかった。調査の結果、この地は旧日本軍により造成されたものと確認された。また、水路を挟んで南側の平坦地では、一部弥生時代の土器と遺構が出土した。

(イ) 整 備

- ・案内板
- ・石塁図化
- ・通路整備
- ・転落防止柵

(ウ) その他

- ・整備委員会を整備計画書策定のため2回開催する。
- ・石塁周辺の樹木伐採（伐採してから10年が経過し雑木によって石垣が見えにくくなったため、可能な限り石垣を露出させる）
- ・礎石の平面図作成
- ・復元・修復をするためにも縮尺を原寸に近い状態で二ノ城戸、三ノ城戸平面図を作成する（門付近）
- ・整備の段階で三ノ城戸の礎石を元の位置に設置する。
- ・紛失した礎石はレプリカを置く（ビングシ門・二・三ノ城戸）
- ・防人の生活していた場所は特定されていない。烽の調査と同様今後の課題となる。
- ・最盛期には100人から200人規模の防人が常駐していたのではないだろうか。
- ・金田城以後の追跡調査を整備計画に組み込む。
- ・13年度計画（案）の石垣調査は整備計画の中で作成する。

○第13回整備委員会

①開催日時 平成13年9月12日(水)

②構 成

委員名 八 木 充【京都学園大学人間文化学部教授】
小 田 富士雄【福岡大学人文学部教授】
中 村 一【京都造形芸術大学教授】

坂 上 康 俊【九州大学文学部教授】
林 一 馬【長崎総合科学大学工学部教授】
永 留 久 恵【郷土史家】
扇 貢【美津島町文化財保護審議会委員】

指 導 本 中 真【文化庁記念物課主任文化財調査官】
副 島 和 明【長崎県学芸文化課埋蔵文化財班係長】
馬 場 秀 喜【長崎県学芸文化課】

町 組 織 犬 東 甫【教育長】
俵 次 男【事務局長】
福 井 順 一【生涯学習係長】
小 田 恵美子【生涯学習係副参事】
田 中 淳 也【生涯学習係主事】 調査担当
コンサル
タント 真 鍋 建 男【空間文化開発機構】
池 畑 和 子【 】

③審議内容

(ア) 発掘調査箇所について

- ・二ノ城戸石垣周辺・土塁の発掘調査
- ・三ノ城戸礎石調査・実測作業

(イ) 整備内容

- ・石塁図化 1/20 立面図・平面図 横断面図 1断面 石段面清掃
- 基準点測量 4級基準点2基設置
- ・樹木伐採 林地の抜開・玉切・整理作業 5,000㎡
- ・図面作成 金田城跡全体図(8面) 1/1000→1/500に拡大
- ・二ノ城戸城門跡
の使用石調査 城門を形成している使用石を専門的見地から調査依頼する。
- ・整備基本
計画書策定 整備全体計画(長期・年次計画)※町単独予算

(ウ) その他

- ・一ノ城戸現況調査

二ノ城戸、三ノ城戸には門礎石が確認されているが、一ノ城戸は不明のままである。現在の通路は当時存在したのか疑問が残るため詳細に踏査する。

・今後の遺構復元・整備にあたり建築学専門の委員の増員が必要。

○第14回整備委員会

①開催日時 平成14年2月21日木

②構成

委員名 八木 充【京都学園大学人間文化学部教授】

小田 富士雄【福岡大学人文学部教授】

中村 一【京都造形芸術大学教授】

坂上 康 俊【九州大学文学部教授】

林 一 馬【長崎総合科学大学工学部教授】

永留 久 恵【郷土史家】

扇 貢【美津島町文化財保護審議会委員】

指導 本中 真【文化庁記念物課主任文化財調査官】

副 島 和 明【長崎県学芸文化課埋蔵文化財班係長】

古門 雅 高【長崎県学芸文化課主任文化財保護主事】 調査指導

馬場 秀 喜【長崎県学芸文化課】

町組織 犬 束 甫【教育長】

俵 次 男【事務局長】

福井 順 一【生涯学習係長】

小田 恵美子【生涯学習係副参事】

田中 淳 也【生涯学習係主事】 調査担当

③審議内容

ア 発掘調査結果

ピングシ山鞍部南西部より掘立柱建物跡が1棟検出された。規模は梁行1間、桁行3間の側柱の建物跡である。地山を加工し整地された平場に建てられており、柱穴は岩盤を掘り込んでいる。ピングシ山北斜面で検出された掘立柱建物跡と比較すると柱穴は双方とも円形で、柱間、深さとも酷似している。今回確認された掘立柱建物跡の特徴は、①建物内部より炉跡が確認されたこと。②北東及び東側から柵列・目隠し塀などと考えられる小柱穴が検出したことの2点が上げられる。これまでの建物跡との違いは、内部に火を焚いた形跡があることから防人が生活していた詰め所・宿所目的の建物跡だと考えられる。

・三ノ城戸測量調査は未実施。

・今後の調査費用を計上する。

イ 整備内容

- ・石塁図化 1/20 立面図・平面図 横断面図 1断面 石段面清掃
- ・基準点測量 4級基準点2基設置
- ・樹木伐採 林地の抜開・玉切・整理作業 5,000㎡
- ・図面作成 金田城跡全体図(8面) 1/1000→1/500に拡大
- ・二ノ城戸城門跡の使用石調査 城門を形成している使用石を専門的見地から調査依頼する。
(次年度へ変更)
- ・整備基本計画書 整備全体計画(長期・年次計画) ※町単独予算策定

④14年度事業について

ア 発掘調査

- ・試掘調査箇所は①東南角石塁, ②ピングシ門付近, ③ピングシ鞍部
- ・東南角の調査は①内側の遺構確認調査。②外側の状況を詳細に調査する。

イ 整備

- ・実施設計, 環境整備工事(園路整備, 遺構説明板設置, 土塁修復等)を行うことについては時期尚早ではないかという意見もあったが, 今年で発掘調査は9年目になり整備材料も二ノ城戸城門跡, ピングシ土塁, 門, 建物跡3棟等がある。これからは調査と並行して整備を行う必要があり, 行政・住民も望んでいる。(逐次調査・逐次整備) これ以上整備は延ばせない。
- ・ピングシ門の巨石(土留め石)を露出させ見せることはできないか。
- ・土塁, ピングシ頂上部など調査が終了されているところから整備を進めていけば影響はない。土塁上の木を伐採したりする。土塁, 建物跡の整備内容は今後(実施設計)具体化させる。
- ・土塁は現状のままで保存する。
- ・石垣調査はその背後, 前面も加える。
- ・整備の手法は調査と並行して行う事が大勢を占めていた。
- ・導線(通路)の整備を早い段階で着手したい。(整備のためにも)
- ・工事・整備に係ると現在の通路では運搬面で対応できない箇所が多い。
- ・丸太による通路整備も7~8年が経過し腐食が進んでおり耐久性の良いものに変えていく必要がある。
- ・大吉戸神社に浮棧橋を設置する。高額なため予算をもう一度見直す。浅茅湾周遊船規模の船が接岸できれば良い。
- ・まちづくり推進総合補助金に浮棧橋が該当する。補助率は1/2で限度額は1千5百万円。
- ・年次計画には大吉戸神社拠点の整備は平成20年となっているが, 早い時期に行いたい。
- ・自動車・管理用道路整備は計画(平成19年度)より早い時期に取り掛かる。
- ・蔵ノ内地区整備の前に土地の公有化(買上げ)を計画に盛り込む。(私有地のため)

- ・各城戸の調査は三ノ城戸，一ノ城戸，二ノ城戸の順が望ましい。まず三ノ城戸は礎石の調査を行い整備も二ノ城戸並にする。一ノ城戸は平坦部の調査を行うとともに城門の調査も実施する。本格的な整備はその後になる。二ノ城戸の調査は城門が調査によって明らかとなっており，後背部の調査は急ぐ必要はない。中期・長期事業期間で実施する。整備に関してはメインの一つとなる。
 - ・二ノ城戸城門跡の敷石は砂岩でもろい。そのまま露出させるには無理がある。礎石は石英斑岩で問題はなく，こちらが敷石より若干高いので，上に何らかの保護処置をして高さを揃え整備してはどうか。
 - ・大吉戸神社に休憩所，便益施設をつくり海路の拠点とする。
 - ・登山道入口に入山ボックスを置き，直接訪れた人に対応できるようにしては。
- ウ) 復元部会について
- ・委員を選定するにあたり①人数の制限はない。②他の組織では意見が偏らないように建築の専門委員を複数置いている。③場合によっては整備委員以外の専門家に加わってもらう必要がある。
 - ・大宰府のやり方を参考にしてはどうか。
- エ) その他
- ・ホームページで金田城のアクセス，船や車，宿の連絡先を載せ，人が訪れやすいようにソフト面の充実も図る。
 - ・今後整備・調査が益々増えるため人員を増やす必要がある。体制の強化。

第3章 調 査

(1) 整備に伴う調査の履歴

・第7次調査

①期 間 平成11年（1999）9月20～10月29日

②調 査 地 二ノ城戸谷部（城門跡）

③調査面積 15m²

・第8次調査

①期 間 平成12年（2000）9月19～10月26日

②調 査 地 蔵ノ内平坦地

③調査面積 110m²

・第9次調査

①期 間 平成13年（2001）9月25～11月12日

②調 査 地 ビングシ山鞍部南西部

③調査面積 120m²

・第10次調査

①期 間 平成14年（2002）10月10～12月13日

②調 査 地 東南角石塁付近

③調査面積 120m²

(2) 二ノ城戸城門跡の調査（平成11年度）

①二ノ城戸の現状

二ノ城戸付近は、標高24m付近に位置し、南北より石塁が迫る。南北双方の石塁は損壊が著しいが、とくに南側の石塁の損傷は激しい。北側石塁の現存する高さは2.8mであるが、中央付近は2.6mにその高さを減じている。南側の石塁のかつての高さは推定できないが、北側石塁との標高差が2m存在し、南側の石塁は急激に標高を下げて中央の崩落部にいたる。そもそも二ノ城戸付近には二つの柱穴（そのうちひとつは軸摺穴）をもつ門礎石と、谷部に流出した礎石（1穴）が存在することから、かつてここに城門が存在したことが推定されていた。しかしながら二ノ城戸の状況は、先述したように石垣部分の崩落が著しく、大小の崩落石が城戸全面に散在するという状況であった。とくに、城門のあたりとおぼしきところは、崩落石がマウンド状に堆積し、その上にはカシの巨木が生えるというありさまで、調査前には主要な遺構は破壊されたものと推定されていた。

②調 査

ア 調査の概要

これまで二ノ城戸の先端部には、3個の巨石を積み上げた石積みがあり、原位置を動いていないと

想定されていた。さらにこの石積みはその場所から判断して石塁の石垣の一方の角（コーナー）ではないかと推定された。調査はこの石積みを基点として、石積みの根石を露出させながら、南へ延長するところから開始した。崩落石や崩落土を除去していくと、南へ向かって側壁の根石の列が検出されたため、当初の想定通り、この三つの巨石の石積みは二ノ城戸の南側石塁石垣の角（コーナー）であると判断した。次に二ノ城戸北側の石垣部分の根石を検出すべく調査を継続した。すると現地地表下より、原位置を保つであろうと推定できる根石を発見した。さらに南側の石塁の角（コーナー）に対応した北側の石塁の角（コーナー）を検出しようと試みたが、原位置を保つ根石が発見できず、苦慮していたところ、城門の北壁に使用されたとみられる巨石が出土した。この巨石を中心に東西に崩落石を除去していくと、推定したとおり城門の北側の壁があらわれた。北壁は整然とした石垣で構成されていた。この後、城門の床面は石敷であることが判明し、既存の門礎石と対になる礎石が検出された。さらに門柱の礎石が2対計4個、原位置を保って検出できた。また城内入り口部分は、袖石をつかって狭めていることもわかった。袖石部から城内への進入部には2段の石組み（階段）が残っていた。

イ) 城門の概要

城門は床面先端部から城内入り口部の石段までの奥行きが4.0m城門入り口の間口は南北壁間の距離とすると先端部で3.2mを測る。城内進入部は袖石によって狭められているが、現存する袖石間の幅は1.8mである。しかし南側の袖石に続く石が流出した可能性が高く、城内進入部分はさらに狭かったと推定される。このことは2段目の石段が1段目より幅が狭くなっているところから推定できる。したがって2段目の石段の幅を考慮して復元される袖石間の幅は1.4～1.6mである。

城門は1間×2間の礎石立建物跡で6本柱と推定される。規模を柱穴の心々間によって測ると、東西方向は338cmと346cm、南北方向は279cmと280cmである。

ウ) 遺 構

①北 壁（側壁）

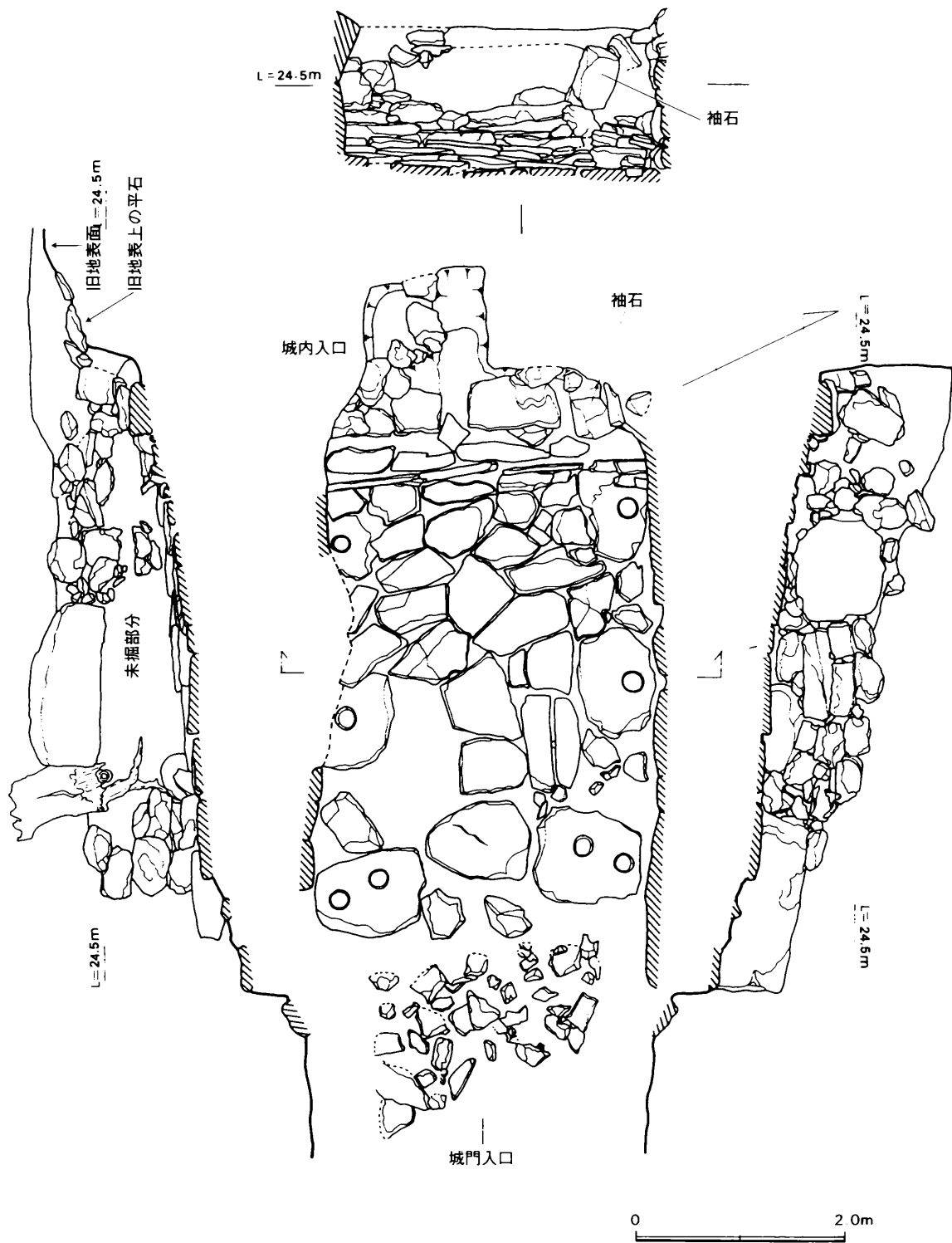
城門入口部に高さ70cm、幅170cmの巨石塊をおく。その後方に石垣を築く。石垣は残存部で4段の石積みである。石英斑岩を用い、石塊の長軸を南北におき、小口を面としている。小口面は平滑に仕上げている。積み方はおおまかに目地をそろえるもので、石塊と石塊の間には角礫を入れて固定させている。根石は石敷によって不明である。

城内入口部より3mほど入ったところに高さ80cm、幅90cmの巨石塊をおく。これら城門入口部は石垣状ではなく、石塁と同じ積み方である。このことは南壁も同様である。

石垣の残存高は110cmである。石垣は若干土圧により城門内に傾く。

②南 壁（側壁）

城門入口部は石垣が構築されているが樹木により若干損なわれている。残存部の石垣は4段である。石材は石英斑岩で、ほぼ目地をそろえている。表面は面とりして平滑に仕上げている。石塊の間は角礫で充填し固定させている。根石部分は不明である。石垣の残存高は1m、南壁中央には高さ60cm、幅160cmの巨石が斜めになって座っており危険なため巨石下の部分は未調査である。城内入口部は石



第4図 二ノ城戸城門跡実測図 (S=1/60)

垣ではなく石塁の構築と同じ積み方である。充填土は突き固められたように締まっている。

③敷 石

27個の偏平な石によって石敷が施されている。粘板岩と石英斑岩よりなる。粘板岩が多い。城内入口部分の方が城門入口部分より高く、床面は傾斜をなしている。この傾斜はもともとあったものと推定される。

城内北西部はやや陥没している。土圧か樹根によるものと思われ、当初は同じ高さにそろえられていたものと推定される。

城内入口部では2ヶ所に敷石が流出した部分がみられる。礎石は例外なく石英斑岩が使用されている。

④石 段（城内入口部）

階段の一段目は粘板石の板石を立てている。土留めの機能をもつものであろうか。

北壁沿いの直立した板石は二重につくられている。幅3.1m。立石の後方は長細い砂岩の板石を4枚敷いている。2段目は石英斑岩によって段がつくられている。袖石によって幅が狭められている。推定幅2.0m。石段の中央部は残存しないが、前方に移動した石の可能性もある。3段目は石英斑岩を立てている。南側には残存しない。旧地表を含めると計4段の石段よりなっていたと推定される。1段の高さは20～25cmである。

⑤袖 石

城内入口部は袖石によって狭められている。北側の袖石は原位置を動いているものの、35×35×50cmの直方体である。北壁の石積みは袖石に向かって緩やかに回り込んでいる。根石も同様である。袖石の上部には50×50cmの板石を斜めに打ち込んで楔にして袖石を固定している。

南側の袖石は北側の袖石の半分くらいの大きさで隣にもうひとつの石があったものと推定された。これは石段の石がないことから証明される。南壁の石積みは袖石に向かってゆるやかにカーブした石が袖石の下に積まれている。

⑥城内の旧地表

表土下40cmほどで旧表土にいたる。20cm角ほどの石英斑岩を用いて石敷き状に平につくっている。旧地表は若干の傾斜をもって南北の各袖石に接続する。南側の袖石の後ろには2枚の平石が傾斜をもて袖石に向かっている。この平石は旧地表にのっていると考えられる。

⑦石段と旧地表の関係

城内入口部の石段は敷石部分との境に粘板岩の板石を立て、その後ろにやはり粘板岩の板石を敷いて1段目としている。2段目は石英斑岩の塊石を使用する。1段目と2段目の高さは25cmである。3段目も石英斑岩の塊石が使用され、2段目との高さは20cmを測る。3段目の塊石を踏んで旧地表の平石に至るものと考えられる。

⑧城門入口部斜面

石英斑岩を用いて斜面に打ち込むように石積みをおこなっている。石段の石材は流出しているが、



北側壁①



北側壁②



北側壁③



袖石



南壁と階段状遺構



城門全景



南側壁



城門入口部分

偏平な石英斑岩を石段に用いていたと推定される。南側の残存した石などより4段の石段が推定される。

⑨小 結

発掘調査で門の構造が明らかとなったのは、全国でも数例しかなく金田城では初めてである。これまで三ノ城戸でしか確認できなかったが、雨水によって破壊されており正確な構造は不明であった。門は1間×2間の礎石建物で、城門入口の階段上にあったとみられる礎石1個が谷部に流失している。南側の側壁は残りが悪く巨石は流動しており危険な状態である。現在土のうで支えている。敷石は粘板岩で風化しており剥げやすいため、出土した状態で公開することは不可能である。

今後、整備計画の中で二ノ城戸城門跡は非常に重要となる。左右の石塁も含め門全体の整備手法を協議し、修復・復元を早急に実施することが望まれる。

(3) 蔵ノ内平坦部の調査（平成12年度）

①蔵ノ内の現状

蔵ノ内は金田城指定区域の東南部、登山口付近と林道南部一帯に位置する。標高は8m前後の場所にある。この地には明治33年城山の頂上付近一帯に砲台が築かれた折、その宿营地として利用された。現在は桧が植林されている。旧日本軍の施設跡として兵舎・倉庫・井戸跡等が残っている。水路を挟んで南側にも平坦地が存在するため、広範囲にわたって調査を実施する必要があった。指定区域内では最大の平地が存在し、登山口に近くその地名からこの地が調査の対象となった。

②調 査

ア 北側平坦地の概要（第5図）

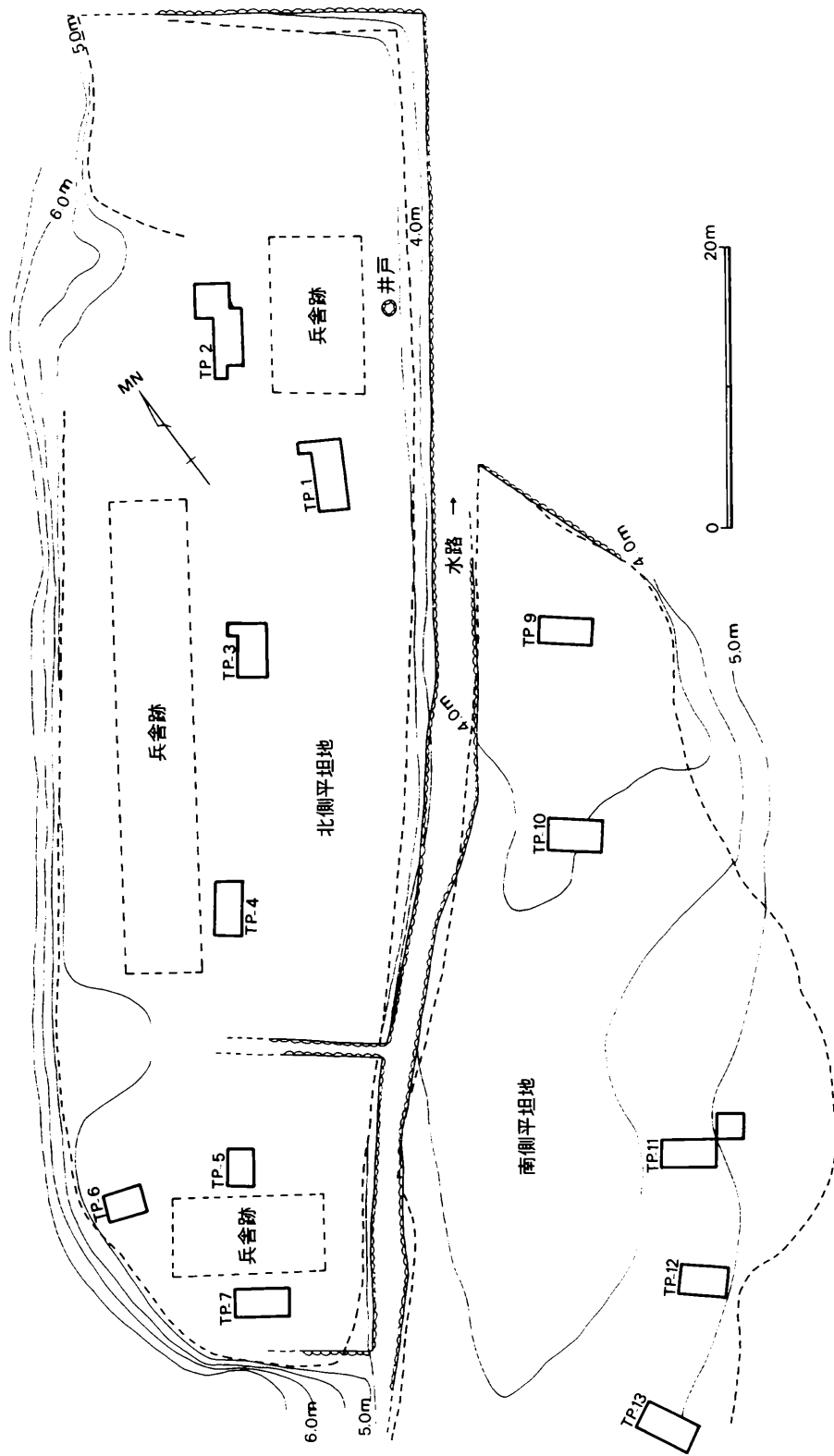
平成12年度の調査において実施した。

調査地である平坦地は桧木が均等に植林されているため、その間を調査することとした。トレンチも地形に合わせて、並行または直交させることとした。

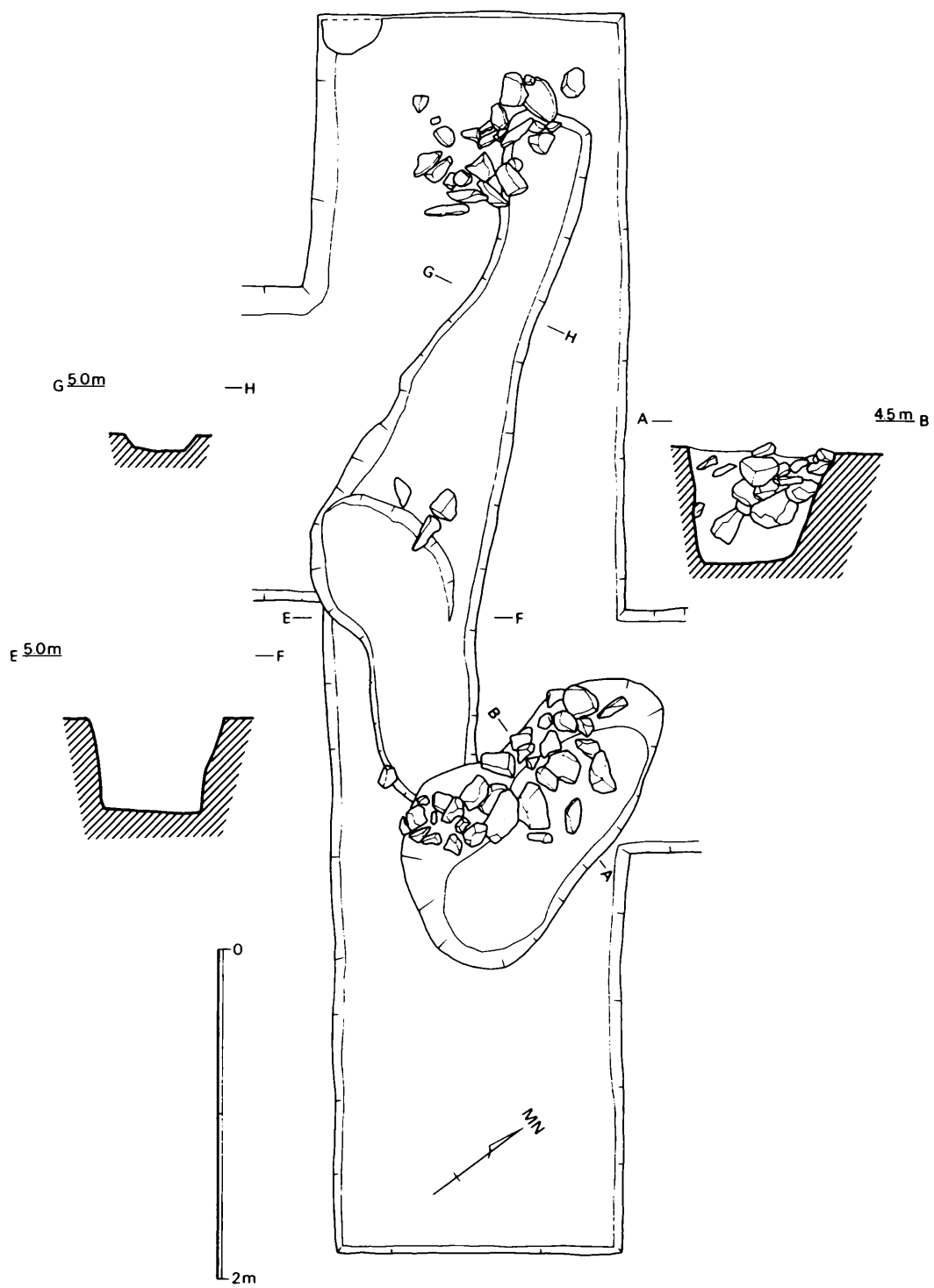
イ TP1の土層

調査地に兵舎跡3棟、水路、井戸跡が確認できる。トレンチTP1（2m×5m）を東南部に設定した。表土下10cmで第Ⅱ層（黄褐色土層）が検出した。対州層群の礫（2～3cmの角）を含む。Ⅱa層は締まりがなく、礫はⅡ層よりも大きい。第Ⅲ層は灰褐色土層の間に有機物によって灰色となった層で礫は少ない。客土前の旧地表面である。第Ⅳ層（黄褐色砂礫層）は砂礫を含んだ層で谷底の水流によって堆積した状況であった。何れの層からも遺物は確認できなかった。

各トレンチTP1～TP7を北側平坦地全体にわたって設置した結果、客土を盛って造成された地形であったことが判明した。蔵ノ内の旧地形は本来傾斜があり下がっていたとみられる。旧日本軍によって客土を盛って造成し軍用地として利用されていた。古代の遺構の痕跡は確認できなかった。表採で須恵器片を1個採取した。



第5図 蔵ノ内試掘坑配置図 (S = 1/500)



第6図 蔵ノ内地区第11試掘坑の遺構 (S = 1/40)

ウ 南側平坦地の概要

南側平坦地は旧日本軍によって造成された北側平坦地と水路を挟んで相對する。東側は湿地帯になっているが、乾期には水気はなくなる。西側は幅が徐々に狭り奥の谷へと一体化する。谷部へ近くなるほど大雨によって流失した枯れ木や石が散在している。

エ 南側平坦地の調査

以前畑として使用していたこともあって表土は軟らかく火を焚いた形跡もあった。T P 9～T P 12 四つのトレンチを設定した。(第5図) T P 11では表土の下第Ⅳ層は焼地・炭化物層であった。これは炭焼窯が隣接しているためであった。第3層(黄褐色砂礫層)より弥生後期の溝の遺構が検出した。溝は南東～北西にかけて広がり南北端に集石が出土した。他の遺構は検出しなかった。T P 11は水路から20m程離れているが第3層より下層は砂礫が多く水も沸いた。

オ 小 結

今年度の調査は金田城の登山口付近、蔵ノ内を調査した。水路を挟んだ両側の平坦地にトレンチ方式により調査を実施した結果、残念ながら金田城関係の遺構・遺物の確認はできなかった。水路の南側より弥生時代の遺構と土器を確認しただけであった。この地は厚い客土を持って形成されており元々は中央の水路側に傾斜していたと考えられ、現地形は旧日本軍によって造成されたものと判断した。



第11試掘坑
溝状遺構検出状況



同
土坑検出状況



土坑完掘



遺物出土状況

(4) ビングシ山鞍部南西部の調査（平成13年度）

①ビングシ山鞍部南西部の現状

ビングシ山鞍部の南西部に位置し、標高は70mの場所にある。ここより南に100mの位置に三ノ城戸があり、東はビングシ山頂部、北東200mには二ノ城戸となる。この地も例外ではなく、桧が植林されており、谷部（三ノ城戸）へ緩やかな傾斜地となっていた。

②調 査

ア) 調査の概要

平成5年度の発掘調査では鞍部中心部より遺構の検出はされなかったが、北東側（二ノ城戸方面）より、土塁とそれに伴う門礎石が1個検出され、この地に門があったことが確認されている。（ビングシ門）

調査地は二ノ城戸と三ノ城戸の中間の鞍部南西に位置し、北東にビングシ門・土塁、南には三ノ城戸となる。現状は南へ緩やかに傾斜しているが、ほぼ平坦地になっており何らかの遺構の存在が期待された。これまでにビングシ山頂部（1間×3間の建物跡）と、北斜面（1間×2間の建物跡）のテラス状の平場にそれぞれ掘立柱建物跡が確認されている。

③遺 構

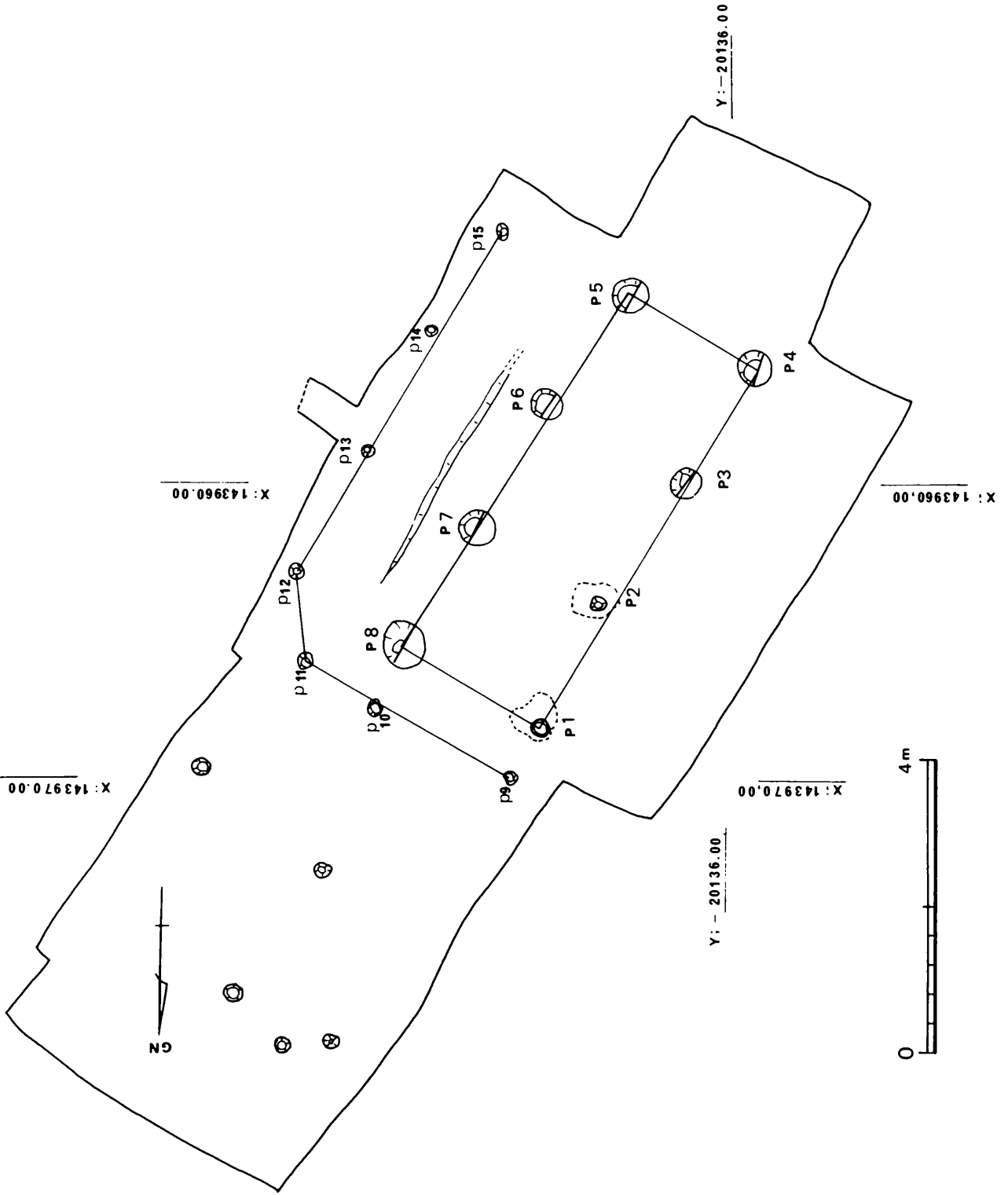
ア) 掘立柱建物跡

調査の結果、掘立柱建物跡が1棟出土した。また、北東および東側から建物を取り囲むように小柱穴が出土した。標高は70m付近に建てられており規模は梁行1間、桁行3間の建物跡で地山を加工し整地された平場に建てられており、柱穴は岩盤を掘り込んでいる。柱穴はおよそ梁行2m、桁行1.9mで直径は48cmあり、小柱穴はおよそ柱間1.7m、直径20cmである。面積は小柱穴を含む全体で約25㎡、1間×3間だと約11㎡である。ビングシ山北斜面で検出された掘立柱建物跡と比較すると柱穴は双方とも円形で、柱間、深さとも酷似している。また、建物内部より炉跡が確認されており、60cm四方の範囲に炭と赤身を帯びた石が検出された。なお、平成9年度のビングシ山南斜面の調査でも炉跡が確認されている。

また、建物跡の北東及び東側から小柱穴が出土した。これまでの建物にはないつくりで、柵列・目隠し塀などの構造物と考えられる。今回出土した建物跡は内部に火を焚いた形跡があり、遺物も見つかっている。ビングシ山鞍部は城の中核と考えられており、防人が生活していた詰め所・宿所目的の建物跡だと考えられる。若しくはビングシ山鞍部の重要性から防人の中でも上位者の施設とする可能性もある。

④小 結

これまでに金田城で確認された建物跡は立地と出土状況から見張りか、倉庫の役割を持つ掘立柱建物があったと考えられる。今回新たに確認された建物跡は出土遺物や炉跡が内部より確認できたこと



第7図 ビングシ山鞍部の掘立柱建物跡 (S=1/80)

から防人が城内で生活していた宿所・詰め所、あるいは一般の防人より上位者の施設だと考えられる。出土遺物、炭素測定の結果は7世紀後半のものであった。

ビングシ山周辺には土塁やビングシ門のほか、今年度の調査で建物跡も3棟目が出土し生活の痕跡も確認されたことから金田城の中核部として機能してきたことが裏付けられた。

ビングシ山周辺の調査はビングシ門周辺を除き一区切りついたが、完了したわけではない。この地が金田城の中核になると未発見の遺構が存在する可能性はある。今後の他地区の調査結果も視野に入れて再調査をする必要がある。

図版3 掘立柱建物跡



南西から



南東から



北東から

(5) 東南角石塁付近の調査（平成14年度）

① 東南角石塁の現状

調査地は石塁の最南端、指定区域の東南部石塁付近に位置する。標高は約66m前後の場所にある。ここより北東に100m行くと三ノ城戸になり、軍道から登って最初の石塁地点となることから、石塁内部（城内）への入り口となる要地である。以前から残存状態の良い石塁が残っており、古代山城には余り例のない「角」（突出部）が確認できる。

② 調 査

ア 東南角石塁突出部について

今回、伐採によってこれまで不明であった東南角石塁の全貌が明らかとなった。「角」の内部にT5～T8としたトレンチ4本を設定し調査を開始した。伐採直後ということもあり、根と落石の除去作業から取り掛かった。調査の結果、遺構の検出はなかったが石塁の基底部分に粘質土を充填し地表を整えてから石垣を構築していることが分かった。「角」の石塁内側部分は崩落した石と堆積土、木の根によって現状はほとんどわからない。一部それらを除去した結果、残存部分が残っていた。

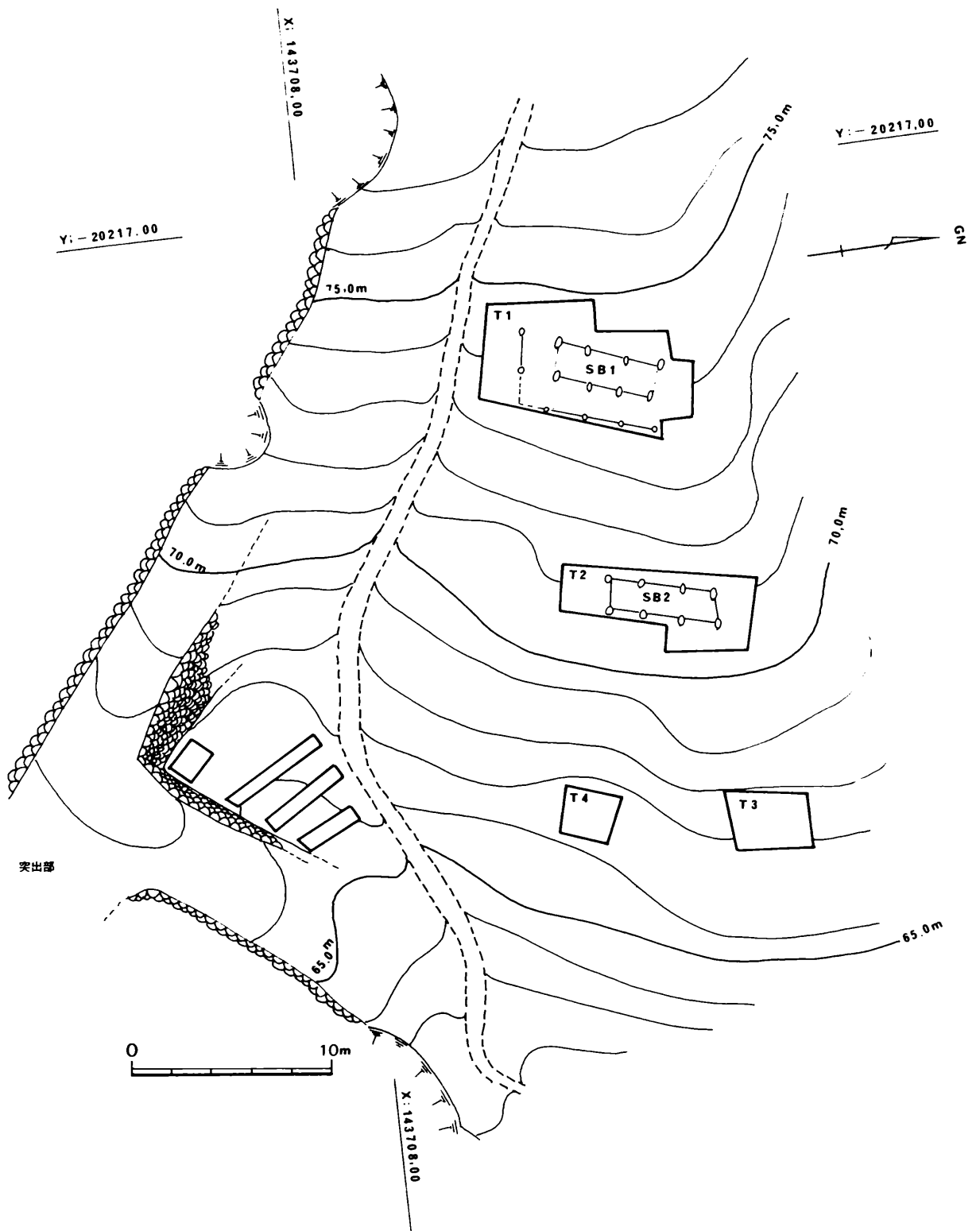
「角」の部分で一番の成果は崩落してはいるがこの部分が「突出部」となっていたことが明らかとなったことである。金田城には一ノ城戸に突出部が存在するが、後世の修築と考えられる部分があることから築城時のものが確定できないでいた。東南角では修築は確認できない。張り出し部分の規模は今後の基底部調査によって明らかとなるであろう。

この突出部の役割が重要となってくる。この地は黒瀬湾が眼下に一望できる。見張りのための施設があった可能性がある。頂上に向かって伸びる石塁の幅と突出部分、基底部及び石塁の上端は今後の調査箇所となる。

イ 掘立柱建物跡について

金田城跡東南角石塁の北部一帯の調査を実施した。丸太の通路に隣接する部分で、当初は木が密集し斜面であったことから調査の予定はなかったが、立ち入ると落葉や小枝、腐葉土が堆積しているものの、狭いながらも階段状に平坦地が存在することがわかった。表面を清掃した後T1を設定し実施した。調査範囲を西へ拡張すると柱穴が検出された。さらに四方に拡張すると7個の柱穴が検出され梁行1間、桁行3間の掘立柱建物跡であることがわかった。これまでの建物跡と同様に地山を加工し整地された平場に建てられており、柱穴は丸柱で岩盤を掘り込んでいる。遺物も建物内部と周辺から須恵器、土師器が出土した。甕は一括して出土した。そのほか、ピングシ北西部で検出された建物跡にみられる小柱穴も確認された。東と南側に建物を取り囲むように6個検出された。本来は東南部に小柱穴がもう一つあると考えられるが根によって検出が不可能であった。前回同様柵列や塀などの柱穴と考えられる。

建物内部のP1に隣接して炭の塊が確認された。柱穴の真横から検出されていることから問題があったが、放射性炭素年代測定の結果、後世のものと判明した。（第5章自然化学分析参照）いずれにせよ出土遺物から7世紀後半の建物跡であることに変わりない。南西側には石塁の突出部があり何



第8図 東南角の調査区配置図 (S = 1/200)

らかの関係があるものと考えられる。

更にT1の東側、1段下がったところを調査した結果梁行1間、桁行2間(または3間ないし4間)の建物跡が確認された。T1より検出した建物跡と比較すると柱間はあまり変わらないが柱穴の大きさがひと回り小さく掘られていた。遺物は数個確認されただけであった。桁行がはっきりしないことから隣接して別の建物跡があることも予想される。倉庫跡と考えられる。

③小 結

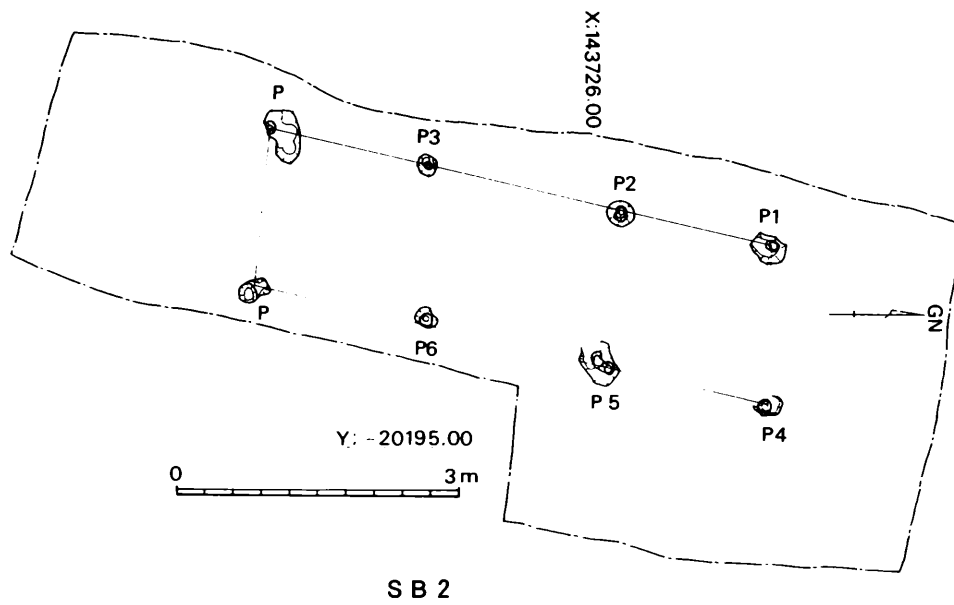
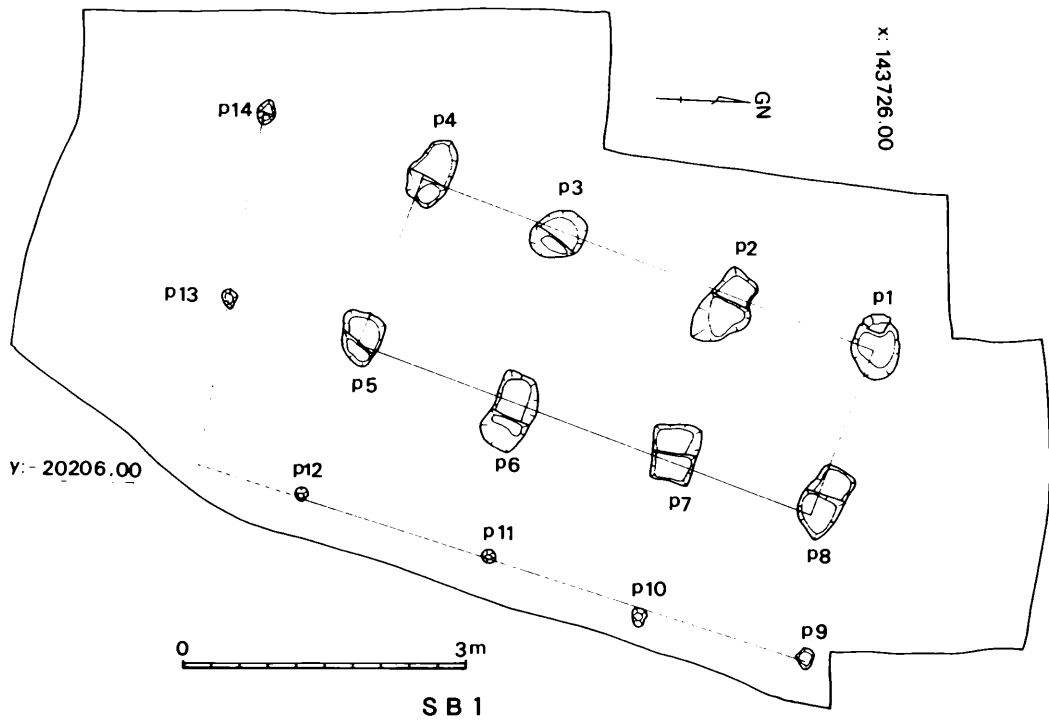
金田城跡の突出部は朝鮮半島の山城にみられる雉(ち)ないし雉城(ちじょう)の影響と考えられる。今回明らかとなった東南角石塁突出部は、金田城の南端に位置し、軍道から徒歩で15分程で到着する。陸路から最初に石塁を見ることができ、城内に進入する入口地点となる。もっとも今の軍道は明治33年に頂上付近に築かれた砲台に伴う道であり、本来の入口(門)は不明である。

突出部は一ノ城戸にも存在し、これまではこちらだけが話題となっていたが、今回樹木の伐採によって東南角石塁部分の形状が明らかとなった。形状は崩落が激しく原形を留めていないが、築城時にあったと考えられる。一ノ城戸の突出部も時期は不明だが後世に修築されおり、同様に築城時に存在した可能性が高い。東南角は金田城の南側、黒瀬湾が一望できる場所にあり、見張りのために築かれたと考えられる。突出部上に何らかの構造物があった可能性もあり、調査する必要がある。後背部の建物跡は防人の詰め所・宿所と考えられる。T2より確認された建物跡は現状では倉庫などに使用されたと考えられるが、規模ははっきりとしなかった。再調査の必要がある。

これまでピングシ山周辺から確認された建物跡は立地と出土状況から見張りか、倉庫の役割を持つ掘立柱建物があったと考えられていた。しかし、平成13年度検出された建物跡は小柱穴が周囲半面を取り囲んでおり、また、内部より炉跡が検出され生活の痕跡が確認された。

今回新たに東南角石塁付近より確認された建物跡は、出土遺物が内部より確認できたことから宿所・詰め所と考えられる。突出部分を含む東南角一帯の管理施設と考えられる。

東南角石塁周辺からは建物跡等の新たな遺構の発見も期待でき、調査を継続する必要がある。



第9図 東南角石墨付近の掘立柱建物跡平面図 (S = 1 / 80)



東南角石塁より黒瀬湾(東側をのぞむ)



東南角石塁突出部(東南より)



東南角石塁



東南角石塁内側(コーナー部分)



東南角北西平坦部 掘立柱建物跡S B 1(北より)



東南角北西部 掘立柱建物跡S B 2(南側より)

附 編

自然化学分析

(1) 目 的

ピングシ山鞍部周辺の調査で建物跡の遺構が3棟確認された。比較的多くの遺物が確認されているが、遺構が確認されない場合は遺物もほとんど出土しておらず年代の確定ができにくかった。遺物は7世紀後半のものが大半を占めていたが、同時に検出する炭化物を平成8年(1996)より放射性炭素測定年代を援用して遺構や土層の年代をより確実なものとするために実施している。

平成13・14年度に相次いで建物跡が検出された。双方ともに内部から炭化物が確認され、建物跡が出土遺物と同時代のものかより確実なものとするため分析した。

なお分析結果はあくまでも放射性炭素による年代であり、実年代や暦年代とは異なっており、実年代や暦年代を考えるうえで参考資料のひとつである。

(2) 分析 方法

試料(炭化物)の年代測定を株式会社古環境研究所に依頼し、 β 線計数法によって分析をおこなった。

(3) 各年度の調査における測定結果

①平成13年度調査の測定結果

第1表が平成13年度の測定結果である。建物跡内から炭化物を1点を分析した。68%の確率を示すとされる 1σ の数値が7世紀前半～7世紀後半であった。

②平成14年度調査の測定結果

第2表が平成14年度の測定結果である。前年度と同じく建物内部より検出した炭化物を1点分析した。 1σ の数値が10世紀後半～11世紀前半であった。検出場所が柱穴に隣接してあったため、出土遺物と同じく7世紀後半のものか疑問視されていたが、後世の炭化物であった。

第1表 平成13年度 美津島町 金田城跡における放射性炭素年代測定結果

株式会社 古環境研究所

1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No 1	ピングシ鞍部 建物跡炉跡	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, ベンゼン合成	β 線計数法

2. 測定結果

試料名	^{14}C 年代 (年 BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年 BP)	暦年代 (西暦)	測定No (Beta-)
No 1	1370±60	-26.4	1350±60	交点: Cal AD670 2 σ : Cal AD610~780 1 σ : Cal AD650~700	162935

第2表 平成14年度 美津島町 金田城跡における放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No 1	東南角石炭北部 平坦地建物跡内部	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, ベンゼン合成	β 線計数法

2. 測定結果

試料名	^{14}C 年代 (年 BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年 BP)	暦年代 (西暦)	測定No (Beta-)
No 1	1010±60	-25.9	1000±60	交点: cal AD1020 1 σ : cal AD990~1040 2 σ : cal AD910~920 AD960~1180	174667

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (1950年 AD) から何年前 (BP) かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際的慣例により Libby の5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代 (西暦)。較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサングの U-Th 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは、約19,000年 BP までの換算が可能となっている。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ (68% 確率)・2 σ (95% 確率) は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。

報告書抄録

ふりがな	かねだじょうあと							
書名	金田城跡Ⅱ							
副書名								
巻次								
シリーズ名	美津島町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第10集							
編著者名	古門雅高・田中淳也							
編集機関	美津島町教育委員会							
所在地	〒817-0322 長崎県下県郡美津島町大字雑知甲 550番地2							
発行年月日	西暦2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かねだじょうあと 金田城跡	ながさきけん 長崎県 しもあがたくん 下県郡 みつしまちょう 美津島町 くろせ 黒瀬および みかた 箕形	442	12	34° 17' 51"	129° 16' 35"	1999/9-10	15m ²	遺跡整備
						2000/9-10	110m ²	
						2001/9-11	120m ²	
						2002/10-12	120m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
金田城跡	古代山城	古代	掘立柱建物跡 城門跡	須恵器 土師器	国指定特別史跡			

美津島町文化財調査報告書 第10集

金 田 城 跡

2003年 3月31日

発行 美津島町教育委員会
長崎県下県郡美津島町大字雞知甲550-2
TEL 0920-54-2271

印刷 株式会社 昭和堂
長崎県諫早市長野町1007-2
TEL 0957-22-6000